

詩歌・小説の中のはきもの (第36回)

大塚製靴株式会社社友 渡辺 陸

「詩歌・小説の中のはきもの」の執筆者である渡辺陸氏が、平成25年2月に逝去されました。謹んでお悔やみを申し上げます。

小誌128号(2004年6月発行)から35回に亘りご執筆いただいたこの記事について、渡辺氏の思いの込められた冒頭の文章を改めてご紹介いたします。

『文学作品の中にはきものが描かれているのを見つけると、そのつど抜書しておいた。会社をリタイアした後、その抜書を整理してみても、人々のはきものを愛して下さることに、改めて感謝の思いを深めた。折りしもはきもの業界を含め、日本経済は多難な状況下にあるが、こんな時こそ、はきものが愛しきものとして描かれた詩歌などの世界に心を遊ばせるゆとりが欲しい。業界人としての感想を付して、作品を紹介して行きたいと思う。』

そのお言葉どおり、ホッと肩の力を抜けるような記事をいつも提供していただきました。深く感謝を申し上げますとともに、渡辺氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

ここに、渡辺氏のご遺志とご遺族のご厚意により、お預かりしていた原稿を掲載させていただきます。

かわとはきもの編集委員長

岡村さちえ (都立皮革技術センター台東所長)

366 観桜会に召された時、フロックコートに、シルクハットに、靴は勿論黒靴でなければいけない。その当時、ずっと赤革の編上げを穿いてゐたので、その前に穿き古した黒のボックスの深護謨を下駄箱から出して、磨きたてた。考へて見ると、少し小さいから、足が痛くて方に靴ずれが出来るので、やめたのであった。しかし、その日一日ぐらゐ、我慢の出来ない事もなからうと思つて、それを穿くことにした。…痛くて、足を踏みたてる事も出来ないの、俥に乗つて出かけたところ—また私の事を贅沢だと思つてゐるに違いない。仲間はだれだつてみんな電車で来るのである。

内田百閒

★『絹帽』から。身の回りは借金取りばかりだといふので、「百鬼園」と号するほどの百閒が、屁理屈をこねて常識を引っくり返してみせる。車に乗るお金があるなら、新しい靴を買えばいいのにそうしないのは、それはそれで一つの生き方なのである。世間の目ばかり気にして、自分というものがなかった時代の際立った個性的な生き様が、靴の一点に集中して表現されているのである。

367 私の場合はね、お洋服はみんなアトランタから取り寄せているの。靴の一足はニューヨークから取り寄せたものよ。私の銀のターコイズの指輪がはるばるメキシコのメキシコ・シティから取り寄せたものだってことは言うまでもないわよ

ね。

トルーマン・カポーティ

★『誕生日の子供たち (村上春樹訳)』から。国土の広いアメリカでは、都会からとてつもなく離れた田舎がある。だから、どこで買ったかを鼻に掛けた科白が小説によく現われる。日本では、銀座では自慢にもならないので、パリとかローマなどで買ったと口にする人がいるが、今やパリもローマもそれほど遠くなくなってしまった。

368 「…ああしてぬぎすてるんじゃないというんだ。おれだって、一度もぬぎすてたことはない」
「なぜいけないの」
「今度はくとき、その方が都合がいいだろう」
「でも、それは僕がそれでよけりゃ、いいじゃないか」
「礼儀上いけない。見苦しい」
「美的見地か」
十七になった息子はそういった。
「なぜそう靴のことにこだわるのかな」
「家族ぜんたいに対して礼儀を失することになるんだ」

小島信夫

★『靴の話』から。キャンプ場の入浴施設でアルバイトをしたことがある。気の早いキャンパーが10人ほど入浴しているときに、履物をそっと揃えておくと後の人もそれに従うことが判った。これを怠ると入口は落花狼藉の惨憺たることになる。年齢に関係なく履物の脱ぎ方では“人類全体に礼儀を失する”人が多い。履物の脱ぎ方については、この父親のごとく日本的良俗を子供たちに伝えたいものである。

369 昨年の4月1日から使いはじめたノートを、ちょうど1年の今日で2ページを残して使いきってしまった。椅子をうしろにずらし、ブーツをはいた両足をデスクに乗せ、三沢はそのノートを見ていた。

片岡義男

★『イアリングをつけるとしたら』から。こんな西洋かぶれの、はしたない、物まね小僧が増えないことを祈りたいが、仮にこんな風習が日本に入ってきたとしたら、人様の前に汚れた、安物の靴など突き出せないから、日本の紳士靴は洗練され、グレードが何段階も上がるかも知れない。もっとも、映画など見る限り、彼ら西洋人は鈍感なのか、ドタ靴でも平気で机やテーブルに足を乗せている。

370 スクリーンに映像——月

ローラ (出てきて) え——お月さま？
アマンダ かわいらしい銀の靴のようなお月さま。
さ、ローラ、左の肩越しにお月さまを見て、お願いするのよ！
テネシー・ウィリアムズ

★『ガラスの動物園 (小田島雄志訳)』から。テネシー・ウィリアムズの父は靴のセールスマンで、1918年にインターナショナル靴会社のセント・ルイス支店販売部長に抜擢された人であるという。テネシーも20歳のとき、父に強要されて靴会社に勤めた。後年彼はその頃を〈地獄の季節〉と呼んでいたというが、そういう人が、お盆や鏡や鎌やペーパーに例えられる月を「かわいらしい銀の靴」に見立てたのである。

371 舞台稽古の時、師匠が着物から舞台の扮装に着替え、足袋を靴下に履き替え、さあ舞台に上がろうとしたら、共演していたエノケンさんがサッと師匠の役の靴を出し、「榎本です。どうぞよろしく」と、うちの師匠に挨拶したんです。…
「おまえがグズだから、偉いエノケンさんにオレの靴を出させてしまったじゃないかッ！」って、ずいぶん叱られました。
林家木久蔵

★『昭和下町人情ばなし』から。師匠は林家正蔵。木久蔵は落語家になる前、白い帽子に白いつなぎの作業衣に、ひざまである白長靴を履き牛乳工場で働いていたという。エノケンが正蔵に付いている弟子の存在を知らないはずはないが、苦労人だから

反射的に身体が動いてしまったのだろう。帽子だの扇子だのを出したのではなく、靴を出したところがエノケンの偉いところである。正蔵という人は謙虚な人だったからさぞかし恐縮したことだろう。

372 案内されて驚いた。びっくりするほどたくさん足の木型があって、一足ごとに名前が書いてある。オードリー・ヘップバーン、ソフィア・ローレン、グレタ・ガルボ……。聞けば、世界的に活躍している人の木型が2,000足あると言うんだ。これには本当に驚いた。オードリーがわざわざ買いにくる店の靴、これを日本で売ったら、女優さんたちは大喜びするだろうと思ったら、ぜひ欲しくなった。

茂登山長市郎

★『江戸っ子長さんの舶来屋一代記』から。エルメス、グッチに断られた後、フェラガモとの取引に成功した。商人だから儲かるか否か頭の中はそれで一杯だったと推測するのは下司のかんぐりである。「女優さんたちは大喜びするだろう」と思ったというのが肝心の点だ。私の勤めていた会社でも同じような有名なカジュアルブランドがあって、私の上司がニューヨークだかロンドンの年寄りがたくさん履いているのを見て、ソロバン抜きでこんな靴を日本で売りたいと思ったら、社長も全く同感で輸入を即座に決意したという。だが、真実は社長は茂登山さんと違い、冷徹にとっさにソロバンを弾いたと私は推断している。断るまでもなく私は下司である。

373 さてそんなに遠路を歩いて、下駄はどんな物を履いてあたか、履物のことは少しも思ひ出せない。どうせふだんのものだから立派な品ではなかつたらうけれど、表がついてあたかどうかも忘れてしまった。履物はいつも母が自分のや私たち姉妹のを一しよに赤坂の平野屋で買って来たやうだつた。その時分は草履は流行でなかつたから、とにかく、どんな下駄にしても、下駄にはちがひない。

片山廣子

★『燈火節』から。明治30年ころの話である。遠路というのは神田小川町から神田橋、和田倉門を通り、虎の門から溜池通りを過ぎ、山王の山すその永田町二丁目までだったという。下駄履きでは大変な道のりだったろう。それにしても履物については何も記憶していないというのが残念である。しかし忘れてしまったことをはっきりと記すというのも珍しく、これはこれで一つの貴重な記録である。

374 中津川清き河瀬の、澄みとほる水の面の上に、何物ぞゆくりなくしも、流れ来るものこそありけれ、小さく白き長方形の、同一の形せるもの、継ぎ継ぎにあらはれ出でて、青き水の面埋めなむとす。…或物は動き行く時、或物は岩肌に憩ふ、或物は動きつづけて、憩へるを後より衝けば、憩へるは驚き動くに、衝きたるは動かむとせず。淵の水岩乗り越えて、滝と落つる下つ瀬見れば、こは何ぞ大滝下駄…

窪田空穂

★『下駄の台 奥秩父にて』から。道路が悪く運搬できないため、下駄の台を大滝村から秩父の町へ川に流して運んだ。1足5銭で取引していたのだという。「滝壺の打騒げるに、止まりて群り遊ぶ。覆ること面白く、くりかへし覆る物よ、逆立ちて倒れし物を、まねびては逆立つ物よ。」と空穂先生は、自分がこれからどこへ行こうとしていたのかも忘れてしまうほど、心を遊ばせていたのだった。

375 「この靴はどうしたものかな」と、プリジオは言いました。というのも、7リーグ靴はとてものがっちりした乗馬靴で、どう見ても、ダンス向きではなかつたからです。そのとたん、それは絹と金糸の上品な靴に変わりました。

それから王子は願かけ帽子をぬいで、もうひとつの帽子—かくれ帽子をかぶると、グルックシュタインの方へ向かって、3歩、歩きました。ところが、王子は同じ部屋のなかで、さっき立っていた場所からきっかり3歩進んだだけで、王子の

そばには、7リーグ靴がちょこんと立っていました。

「こりゃだめだ」と、王子は言いました。

「2足の靴を、いっぺんにはくわけにはいかない！ 単純な計算じゃないか！」

オスカー・ワイルド

★『幸福な王子（大脇美智子訳）』から。
ひとまたぎで7リーグ（21マイル）行く靴と何処へ行きたいと告げると、たちどころにそこへ運んでくれる帽子、被ると他人の目には見えなくなる帽子がそれぞれに限られた性能しか持っていないというのが面白い。どんな衣装にも、冠婚葬祭にも、性別や年齢も問わない汎用とも全能ともいえる靴は、童話にも荒唐無稽な小説にも登場しない。そんな靴は人間の想像力を超えるのだろう。オールマイティーな靴をもっともらしく書く童話作家や小説家が現われることを長年私は待っている。

376 「忘れ難いのは、初めてお訪ねしたときの事だ。ぼくは鼻緒の切れかかった汚い下駄をはいていた。奥さんの信子女史が、鯉節の釜飯をたいて御馳走してくれた。その味を忘れない。又、帰ろうと思って下駄を穿きかけたら、ピシャンコな泥下駄が、きれいに拭かれて、切れかけていた鼻緒まで、ちゃんとスゲ代えられてあった。」

吉川英治

★『忘れ残りの記』から。信子女史とは川柳の井上剣花坊夫人である。昔はこんな細かな心遣いがあったのである。今、ホテルに泊まるとブラシと艶出しのペーパーが部屋ごとに用意されていて、万事がセルフサービスになっているが、かつては温泉旅館でも靴磨きのサービスは当たり前だった。個人の家でも泥下駄を履いて行くと、帰りに綺麗に洗われた下駄が玄関に揃えられていることがあり、私など不作法を大いに反省したものだ。